様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６４３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６４６０６２１

研究課題名（和文）メディアドクターの取り組みによる医療健康報道の質向上に向けた研究

研究課題名（英文）Media Doctor in Japan: to improve the public literacy about health care reporting by analyzing health care journalism.

研究代表者
渡邊　清高（WATANABE, Kiyotaka）

帝京大学・医学部・准教授

研究者番号：８０４２２３０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：海外の評価尺度を参考に、評価手法、指標設定について実際の記事を用いた一致率および妥当性の検証を行った。例として健康診断における基準値、食品の機能性表示、医療用麻薬、著名人のがん報道、新規治療薬について、「利用可能性」「新規性」の評価は一致して高かった一方で、「代替性」「あおり・病気づくり」は評価が分かれる結果となった。情報の対象や目的によって、評価基準は異なると想定された。
医療健康報道に関するアンケートを実施し評価チェックリストが試作された。中学国語科のモデル授業では記事の読み方、ヘルスリテラシーの必要性の共有など好意的な感想が多く寄せられ、広くリテラシー教育にも実践可能と考えられた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of research is to improve the public dialogue about healthcare by helping citizens critically analyze healthcare issues and by promoting the principles of shared decision-making reinforced by accurate and balanced information. We evaluated topics on screening, treatments, drugs, supplements, etc. We reviewed the quality of the stories using a standardized rating scale. Stories were reviewed by researchers, healthcare professionals and journalists. Validity verification of the consistency between evaluators was performed, and the standard evaluation tool were created and revised. Rating scores was high on ‘availability’ and novelty’, whereas score was relatively low on ‘alternatives’ and ‘disease mongering’. This method can be applied in education to promote health literacy.

研究分野：医歯薬学

キーワード：メディアドクター　医療情報　リテラシー　研究成果の発信　マスメディア

１．研究開始当初の背景

医療や健康を話題とする報道は日々大量に発信され、私たちが新聞やテレビ、雑誌などを通して目にしない日はない。受け手である市民、患者・家族の意思決定に少なからず影響を与えるメディア報道。その内容は正しく報じられ、適切に伝えられているだろうか。情報源を提示する研究者・医療者は的確に研究成果を発信しているだろうか。「メディアドクター」とは医療に関する各種報道を評価することで、その質を守ろうとするプロジェクトである。医療の研究者・専門家とメディア関係者がチームを組んで、発信された医療健康記事を臨床疫学、科学的根拠などの視点から新規性、煽りの要素、実行可能性、弊害、コスト、エビデンスの質などの 10 項目によって“採点”採点し、その結果をインターネット上に発信するというユニークな活動で、オーストラリアの研究チームに（Smith, MJA 2005）に始まり、カナダ（Cassels, CMAJ 2003）、米国(Schwitzer, PlosMed 2008)、ドイツなどでも実施されている。研究代表者はこれまでに信頼できるがん医療情報の発信と普及に向けた取り組みを行っているが、医療や科学技術の進歩に伴い、刻々と変化する患者家族、国民の情報ニーズに適合する情報支援モデルを作成することは、医療・健康に関わる者にとって立場を超えた喫緊の課題である。

２．研究の目的

本研究の目的は、患者家族、一般市民による健康・医療上の自立的な意志決定や、施策の決定過程において重要な役割をもつ医療健康報道について、継続的な医療・健康記事の評価と検証結果の発信により、品質の向上とともに国民の医療健康情報のリテラシーを高めることにある。多様な専門分野をもつ研究者、臨床専門家、疫学者などが、メディア、患者・市民の視点から幅広い参画を得た議論の場のもとに、社会に発信された健康・医療記事を臨床疫学などの視点から分析評価し、その結果をインターネット上に発信するというユニークな活動を通して、医療健康報道の質向上に資する医療社会学的研究である。本研究は医学・科学的な側面に加えメディア社会学、人文社会学の視点から効果的な情報普及のあり方について提言につながる評価を行うものである。国民・患者家族向けの情報リテラシーを向上しニーズに適合する情報発信モデルを作成することを企図している。

３．研究の方法

（１）医療健康報道の評価手法の確立

例として新たなメカニズムによるがん治療薬（免疫チェックポイント阻害薬）の治療効果と費用など社会的な視点での評価軸、薬剤のリスク・ベネフィット、科学的根拠に基づくがん検診、臨床試験のエビデンスの伝え方について、報道記事を用いて 40 人ほどの評価者による議論を行った。

（２）医療健康情報発信とメディアリテラシー向上のために必要な要素の検討

医療健康報道に関する信頼性、期待に関するアンケートを継続的に実施した。米国をはじめとした海外の評価軸を邦訳し上記（１）を踏まえ評価軸改訂版を作成した。話題提供とディスカッションにより、記事の書き手と読み手向けガイダンスの必要性、評価結果公表を含めた共有方法について検討を行い、成果の発信および評価活動に取り入れることが可能なものから実践に移すものとした。よりよい記事を書いたり、報道を読んだりするときのチェックリストや簡略版を作成し、パイロットプログラムの試行を行い、情報発信とメディアリテラシー向上に向けて必要な要素を検討した。

４．研究成果

（１）医療健康報道の評価手法の確立

評価者によるメールおよび合議による議論および研究期間中 16 回にわたっておこなわれたグループワークを含むディスカッションにより、評価手法の改訂が継続的に行われ、以下の評価項目に沿って評価を行うことが妥当と考えられた。

① 利用可能性

記事が扱う医療や薬剤について、利用可能な

患者や対象､利用できる時期について、正確な情報を提供している。
② 新規性
記事が扱う医療や薬剤について、新規性に関する正確な情報を提供している。
③ 代替性
記事が扱う医療や薬剤について、既存の代替できる選択肢と比較できる（効果や副作用、コストなどの）情報を提供している。
④ あおり・病気づくり
病気やリスクについて「あおりや病気づくり」を促すことなく、適切に伝えている。
病気、病状の定義、閾値、検査の基準について、「あおりや病気づくり」の視点がない
⑤ 科学的根拠
記事が扱う医療や薬剤について、科学的根拠の質を踏まえた適切な情報を提供している。
⑥ 効果の定量化
医療や検査の効果について、適切な定量的な指標を用いて説明している。
⑦ 弊害
治療や検査の弊害について、バランスのよい情報を提供している。
⑧ コスト
治療や検査のコストについて、他の選択肢など比較参照できる情報を提供している。
⑨ 情報源と利益相反
独立した複数の情報源の取材に基づいて記事を作成している。
⑩ 見出しの適切性
見出しは、記事の内容について適切に記述している。

「新規性（話題の新規性を適切に言及している）」についての評価は一致して高かった一方で、「弊害（副作用・コスト）」「代替性」「あおり・病気づくり」については評価が分かれる結果となった。新たな治療を患者に適応する臨床試験や、健康な市民を対象とするがん検診や予防など、読み手によって求められる基準が異なること、医療保険制度や診療報酬など社会的な視点を取り入れることの必要性が明らかとなった。

（２）医療健康情報発信とメディアリテラシー向上のために必要な要素の検討
上記（１）の評価軸に沿って、一般向けに簡略化した評価表を試作、チェックリスト形式で情報を読み解く助けとして使用することを想定して作成した。これを用いて、中学校国語科でメディアリテラシーをテーマとしたテスト授業を実施、参加した生徒からは医療や健康を扱う記事の読み方や受け止め方、リテラシーの必要性など得るものが多い好意的な感想が多く寄せられた。こうした取り組みは教育や研修におけるヘルスコミュニケーション、リテラシー教育にも実践可能と考えられた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① 渡邊清高：今月のキーワード　免疫チェックポイント　阻害薬におけるバイオマーカー　日本胸部臨床　査読無　2016；75（10）：1138-39
② 渡邊清高：差分解説　地域における緩和ケアと療養支援　日本医事新報　査読無　2016；4799
③ 渡邊清高：差分解説　都道府県計画からみる地域医療とがん対策　日本医事新報 査読無　2016；4802
④ 渡邊清高：今月のキーワード　がん登録　日本胸部臨床　査読無　2016；75(2)：184-185
⑤ 渡邊清高､関順彦 がん薬物療法の開発動向と抗体医薬品の位置付け 医薬ジャーナル　査読無　2015；51(1)：81-86 https://www.iyaku-j.com/index.php?main_page=index&cPath=5_1_15_4343
⑥ 渡邊清高、関順彦　Immune checkpoint を標的とする抗腫瘍薬としての抗体　腫瘍内科　査読無　2014；14(5)：449-454
⑦ 渡邊清高：がん合併時の薬剤投与時の注意と禁忌薬　成人病と生活習慣病

査読無　2014；44：199-204

⑧ 渡邊清高：医療・健康報道を「評価する」メディアドクターとは　情報管理　査読無　2014；57（5）：344-347

〔学会発表〕（計 5 件）

① 夏目まいか、深澤陽子、渡邊清高、関順彦、林和彦、成毛大輔、古瀬純司：都内 3 大学病院におけるがん患者のニーズ調査と充実したサバイバーシップに向けた研究　第 54 回日本癌治療学会学術集会　2016 年 10 月 22 日（パシフィコ横浜、横浜市）

② 渡邊清高、河原正典、田代志門、唐渡敦也、的場元弘、清水哲郎：がんの在宅療養を支える人材育成と連携構築に向けた情報ツール作成と普及に向けた取り組み　第 1 回日本がんサポーティブケア学会学術集会　ワークショップ「がんの支持療法を支えるチームづくりー多職種連携と地域への広がりー」2016 年 9 月 4 日（東京慈恵会医科大学、東京都港区）

③ 渡邊清高、増田昌人：沖縄におけるがんの在宅療養をテーマとした多職種による研修会の試み　第 1 回日本がんサポーティブケア学会学術集会　2016 年 9 月 3 日（東京慈恵会医科大学、東京都港区）

④ 渡邊清高、田城孝雄：放送大学におけるオンライン講座「がんを知る」による社会人向けがん教育資材の効果と活用の可能性に関する検討　第 1 回日本がんサポーティブケア学会学術集会　2016 年 9 月 3 日（東京慈恵会医科大学、東京都港区）

⑤ 仲本奈々、増田昌人、井上亜紀、渡邊清高、青木一雄：医療に関する新聞記事の評価と Web を用いたフィードバックシステムの構築とその検討　第 9 回 パーソナルコンピュータ利用技術学会全国大会（最優秀研究発表賞受賞）2014 年 12 月 6 日（慶應義塾大学　日吉キャンパス、横浜市）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

○新聞

2015 年 1 月 1 日　新聞教会報

医療現場の取材はいま　患者の視点で問題提起　地域医療、育てる役割も

2017 年　情報管理　in press

メディアドクター研究会　第 51 回定例会「情報源としてのプレスリリース：臨床研究の結果をどう伝えるか」

○ホームページ等

メディアドクター日本語版ウェブサイト

http://mediadoctor.jp/

６．研究組織

(1)研究代表者

渡邊　清高（WATANABE, Kiyotaka）

帝京大学・医学部・准教授

研究者番号：80422301